



## 《六甲山の開発》

六甲山の開発は、明治28年、英国人のA・H・グループ氏が西六甲に山荘を建てたのが始まりですが、阪神電車は、六甲山が大阪、神戸から1時間そこそこで登ることができ、しかも水が豊富な高原であることに着目し、昭和2年、西六甲から東六甲にかけての山上一帯、250万㎡に及ぶ森林を有馬郡有野村から買収して六甲山の大掛かりな開発に乗り出しました。



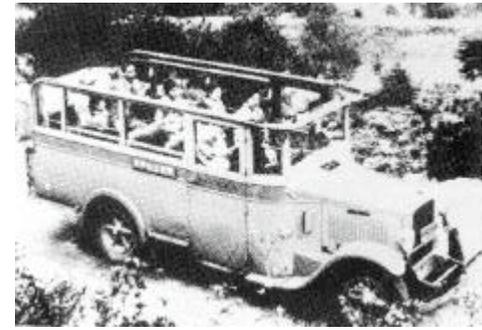
開業当初の六甲ケーブル(昭7.4)

開発は、まず足の便からということで、現在の六甲ケーブルを昭和7年春に開通させ、引き続き、記念碑台から東六甲の極楽溪まで延長7.1kmの山上回遊道路を完成させ、山上バスを走らせました。

そして、昭和8年からいよいよ住宅経営に着手し、ケーブル山上駅東方600mの景勝地「天狗岩」



付近に貸別荘を建てるとともに、六甲ケーブルと協力して、オリエンタルホテル、<sup>りょううんそう</sup>凌雲荘(休憩所、現在は旅館)、高山植物園などの施設を作り、外人やインテリの人々の誘致に努めました。引き続いて昭和12年には、天狗岩の東北600mの人跡未踏の「八代池」のほり20万㎡の山林を切り開いて現在のカンツリーハウスを開園し、その周囲に「雲が岩住宅地」「山水荘住宅地」「カンツリー山荘」を開きました。



山上遊覧バス(昭8ごろ)

これを契機に、山上に続々と別荘や山荘が建ち、現在の六甲山の原型ができ上がったのです。阪神電車は、これら山上に住む人々が平地と同じように生活できるよう、電気・水道の供給はもちろんのこと、電話局の敷地を寄付したり、診療所を設けたりしました。



六甲山回遊道路開通記念碑(昭7.10)

